

養護に関する科目におけるアクティブラーニングの試み —ケアリング概念を取り入れた科目「健康相談活動の理論と実際」の展開—

宮 崎 久 美 子

Trial Distribution of Active Learning in a Subject in Caregiving Science:
Development of Health Consultation Activities using the Concept of Caring

Kumiko MIYAZAKI

要 旨

児童生徒の心の健康問題の深刻化に伴い、養護教諭の実施する健康相談活動は学校現場において重要な教育実践となっている。心を通して身体のケアをし、身体のケアを通して心のケアをする養護教諭の実践は、自尊感情の低下から様々な心の健康阻害を抱える現代の子どもたちにとって有用ではないかと考える。中でも子どもに対するまなざしや関心、人間的な関わりは支援の基盤となる。このような背景を踏まえ、養護教諭養成教育において養護教諭の資質及び専門性の概念のひとつであるケアリングを取りあげた授業を展開した。4年生大学看護学科3年生のうち養護教諭一種免許取得を希望している学生18名に対し、養護教諭のスタンスや行動についての情報を、KJ法を用い学生の思考の中で分析させた。思考の中で支援のプロセスの認知を図り、書くことにより具現化するというアクティブラーニングの特徴のひとつである認知プロセスの外化を実施した。自身の思考を書くこと・表現することを通して活性化することにより、現職養護教諭のスタンスや行動を通して学生自身の態度や価値観を探究することにもつながったのではないかと考察された。また、学生と教員とで作成した図を通して意思疎通を図ることにより、自身の学習成果を認めてもらう体験となり、専門性の探究につながる動機づけとなったのではないかと考える。

キーワード：健康相談活動、アクティブラーニング、養護教諭養成教育

緒 言

養護教諭の役割は、社会のニーズや子どもたちの変容とともに変化してきた。子どもたちを取り囲む環境の変化は、彼らの心身の健康問題を複雑化・深刻化していると言われている。これに伴い、養護教諭の役割も健康診断・救急処置中心の時代から、より多くの役割が求められるようになってきた。

平成9年の保健体育審議会答申¹⁾の中で、「児童生徒の心の健康問題の深刻化に伴い、児童生徒の身体的な不調の背景にいじめなどの心の健康問題がかかわっていること等のサインにいち早く気付く立場にある養護教諭の行うヘルスカウンセリング（健康相談活動）がいっそう重要な役

割を持ってきている」とし、健康相談活動を養護教諭の新たな役割とした。筆者も養護教諭としての実践研究²⁾の中で、日常の執務の中での気づき、思いやり、さらにラポールの形成が支援の重要なキーとなることを報告している。さらに平成20年の中央教育審議会答申³⁾において、養護教諭はその職務の特質からいじめや児童虐待などの早期発見・早期対応を図ることが期待されると述べられている。

養護実践の本質とは、「子どものニーズに寄り添い、生活とのかかわりの中で保健管理を基盤にした、健康教育と合わせた総合的な、子どもの発育・発達への支援⁴⁾」とされている。では、寄り添うということは養護教諭のどのようなスタンスを言うのか。また、生活とのかかわりの中でというのは具体的にどういうことなのだろうか。長い間、養護教諭であった筆者には理解できることではあるが、この実践知を教授する方法は何かという課題を持ったのである。

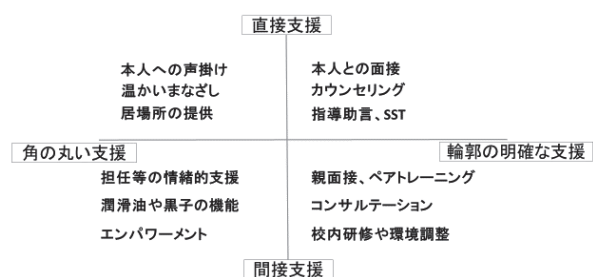


図1 学校臨床における関わり

磯辺⁵⁾は、学校の特徴を生かした援助的な働きかけとして図1のような4つの支援スタイルをあげている。そして、この「角の丸い支援」に必要なのは、子どもに対するまなざしや関心、そして奇をてらうことのない人間的な関わりであるとし、一見、非専門的で地味に見える「角の丸い支援」であるが、実はとても重要でプロフェッショナルな活動であると言及している。左図の左上の

座標にあるような支援を養護教諭の実践の中に具現化したいと考えた。

さて、一方では、2012年の中央教育審議会答申⁶⁾の中で「従来のような知識伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら、知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学習（アクティブラーニング）への転換が必要である」と提言している。また、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」の中で、アクティブラーニングは、「学修者が能動的に学習することによって認知的・倫理的・社会的能力、教養・知識・経験を含めた汎用的能力の育成を図る」とされている⁷⁾。さらに大学教育においては、中教審の言うところの「学士力」と経済通産省の言うところの「社会人基礎力」の双方が求められる。つまり、大学教育においては専門的知識の探求から、汎用的技能の習得にシフトすることも求められているのである。

前述の「角の丸い支援」と共通すると考えられる養護教諭のケアリングに満ちた実践を、教育現場に出る前の理論の中で汎用的能力として育成するという視点に立ったとき、学生が能動的に学習する、思考の中での認知プロセスを書くという形で外化するというアクティブラーニングの手法が効果的ではないかと考える。

学校教育現場では、学校嫌いや不登校など自分のいる場所を見出せない児童生徒の増加や、集団生活をする態度の身についていない子どもたちの現象がみられる。人間関係の中で育つべき心が育っていないことも原因の一つであると考えられる。子どもたちのいじめや不登校、心身症を引き起こすのは情緒の問題であることが多く、心的エネルギーの不足とも考えられ、これはケアされる中で癒され供給されるものであると言われている。つまり、救急処置や健康相談活動を通

して個への人間的な関わりを日常的な職務とする養護教諭に、ケアリングの概念は欠かせないのであり、養護教諭の資質や能力においても必要なものである。ケアリングについての文献の中で例えば、モンゴメリ⁸⁾の言う肯定的で希望的な志向及び敏感さは、養護教諭の資質として重要であり、ノディングズ⁹⁾は関係性の構築において、まなざしを向けるという態度をあげている。また、早川¹⁰⁾も関心を示すこと、配慮すること、耳を傾けることの重要性を説いている。

学校教育の中で、養護教諭によって子どもたちに向けられているケアリングの実践を、学生の思考の中でイメージ化し、さらには具現化するためには、養護教諭の行動の情報を読み解き、カテゴリー化し、概念名を模索するというKJ法が適切ではないかと考え用いることとした。

授 業 実 践

研究方法は、2時間の授業（90分×2）を実施し、授業後に提出された学生のレポート（概念図作成）を分析し、学修の結果を把握した。2時間の授業の概要は、以下のとおりである。

1. 授業の展開（1時間目）

養護に関する科目「健康相談活動の理論と実際」の15時間のコマ数の中の1時間は、KJ法を用いて養護教諭の実践の分析に、2時間目を教員の評価を加えて作成された養護教諭のケアリング行動の概念図を提示する時間とした。養護教諭の児童生徒への関わりや対応に関する23の先行文献の中から、養護教諭が児童生徒の健康問題解決のためにとった行動や、日常の執務の中での対応から114の行動を順不同に並べたもの（配布資料1）と養護教諭のイラストが中心に書かれたA3の用紙を学生に配布した。

【配布資料1】

手をつないで教室に行く	黙って聴く	ソファに座り、一緒に毛布を着て話した	発達モデルと子どもの状態を照合する
「一緒に戻ろうか」と声をかけ手を差し出す	無視したり邪魔にしたりしない	スキンシップ	子どもを本気で心配することに関心を持っている
自我の再構築を図る	本人が意欲的に取り組めるものへの励まし	手紙の交換をし、アイデンティティの建て直しを図る	生活リズムを修正する
成長段階と受け止め根拠強く自立を見守る	子どもが自分で決めたことに応援する	遊びを中心に信頼関係を深める	居場所作りを意識して行う
人間関係の拡大を図る	測定の結果を子どものレベルに応じて伝達する	自分が必要とされていると感じた	安心できる居場所をつくる
友達との交流を働きかける	遠くから見守り、本人の自立を支援する	発達段階を踏んだ支援を行う	ほっとできる保健室の雰囲気作り
他の子どもたちと仲良くさせる	自己主張を自立の兆しと判断し、見守る	營める	スキンシップをしながら気持ちを受け止める
秘密を守る	母子関係の学びなおしが必要と考えた	肯定的に見守る	さすったり、たくさん話をする
約束を守る	保護者・家族への支援をする	子どもを認める	ある作戦「おまじない」を作った
部活動と一緒にする	子どもの話を最後まで聞く	家庭での様子を知る	本人をできるだけ学校にとどめておく
よくなっていることを共に喜ぶ	怒らない	担任と連絡をとる	子どもであっても対人関係として平等である
個別に丁寧に対応する	受容的に傾聴する	職員間で共通理解を図る	人と人が関わるのは良い事というイメージを送る
個別に丁寧に対応する	一緒に過ごす時間を大切にする	子どもに黙って寄り添う	表情・態度・言葉の観察をする
一人一人を名前と呼ぶ	「何か嫌なことあった？」	共に行動する	観察・問診・触診・バイタルサインのチェックを駆使する
本人の症状を受け入れ、共感する	「どうしたの？」	同じ話でも繰り返して聴く	無言・うつむいている姿勢・表情を観察する
進行を見守り情緒の安定を図る	体調が悪いときに親身に対応する	子どもの泣きを聴く	自信を持って受け止める
子どもの思いを受けとめる	母親のかかわり不足を補う	にこやかに	何も心配することはないと養護教諭の姿勢を示す
母親からの相談を受ける	迅速に対応する	身体的苦痛・心の訴えを余裕を持って聴く	症状緩和の対応をし、心身の安定を図った
努力している両親を支えた	病気を分かち合う	本人のつらい気持ちを理解する	できる手当てをしようとした
「ありがとう」と感謝の気持ちを示した	辛さを分かち合う	学習をサポートする	ニーズに合った対応をする
子どもと一緒に考える	関係者に状況を伝える	広い視野で生徒に必要なことを判断し、提示する	痛みの訴えを受け止め、安心させて戻す
子どもの疾病について一緒に勉強する	関係職員との連携を図る	こうなっていきたいという健康観や指導観を持つ	保健室に何回来てても気持ちを込めて対応する
母親と一緒に行動する	日記を付けさせ自己開示の場を作る	抱っこするような姿勢をとりながら話を聴く	「いつでもいいよ」と受け入れる
母親の混乱を受けとめる	関心を持っていてというサインを送る	からだに触れる	クラスの受け入れ体制や環境づくりをする
友人関係の支援をする	彼者を持っているという子にも情報を送る	さすってみる	保健室を居場所として提供する
他の者とかかわり場面を設定する	保健室にいない子にも情報を送る	保護者の理解と協力が得られるよう働きかけた	話をしながら子どもの気持ちを共感的に聴く
同世代の子どもとかかわりも必要である		専門機関との連携を図る	揺れ動く気持ちを受け止める

配布資料1は、現職養護教諭がとった行動や子どもたちへの対応を順不同に並べたものである（筆者作成）。

そして、養護教諭の114の行動をKJ法でグループ化し、各グループに名前を付け、その概念を説明できるものは説明し、関連性を描けるものはA3の養護教諭のイラストの描かれた用紙に記述するよう説明した。KJ法を用いることにより、無秩序に表記された養護教諭の行動をグループ化していく過程でその行動をイメージ化することができ、一連の関連した秩序ある行動であることを学修することができると期待した。また、ネーミングをすることにより養護実践の中にケアリングの概念を探索することができるとともに、思考の活性化や新しい概念の発見というアクティブラーニングとの相乗効果もねらった。

2. 授業の展開（2時間目）

【提出資料1】



学生がKJ法により作成した養護教諭のケアリング行動の概念図

学生から提出されたもの（提出資料1）をもとに、どのようなネーミングがされており、どのような概念説明がされていたかを総括した（表1）。さらに提出資料1をもとに概念図を教員がスライドに作成し、ディスカッションの資料とした。

表1は、よく記述されていた内容を示した。グループ名には、傾聴・受容・共感・信頼といったケアリングの概念が命名されている。グループ名を付けた後、その島を説明しようとする思考の過程では、人間関係の改善・良好を図る、子どもの能力を成長させる、自信を持たせる、保健室内外での子どもの様子の把握など、養護教諭の実践が具体化すると同時に自身の言葉に置き換えられている。

表1 グループ名と説明文の概要

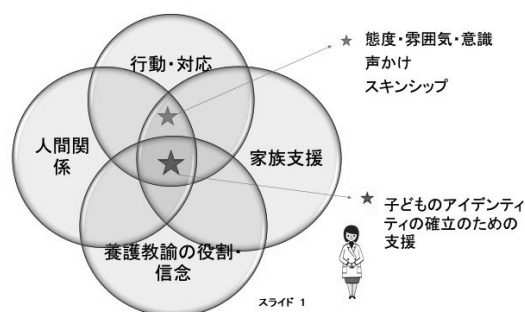
グループ名	説明文
傾聴 スキンシップ 受容 傾身 尊重 誠実 共感 思いやり 安心 信頼 気持ち 距離 専門性 価値観 養護教諭の役割・信念 態度・雰囲気・信念 役割・本質 養護教諭にしかできないこと 養護教諭としての在り方	<p>他者との交点 コミュニケーションへの支援 人間関係の改善・良好を図る 信頼関係の構築 信頼関係を深めるための行動</p> <p>待つ 子どもを否定しない 共に考え、共に分かり合う 距離を縮める 一緒に考える姿勢 友達になる</p> <p>最善の対応ができるようにする 子どもの理解 個性性を考えた対応 アセスメントと対応 心身の健康を守る 見る、観る、診る、見守る 本人に望ましい支援 知識・態度・技術の習得 疾病を持つ児童生徒への支援 疾病の予防</p> <p>自立 子どものアイデンティティの確立のための支援 自立を支える 成長・発達を見守る 子どもの能力を成長させる</p> <p>自信を持たせる 自己肯定感を育てる 子どもの自尊心を向上させる 子どもの能力を信じる</p> <p>環境 安心できる環境 保健室に未やすい環境づくり 養護教諭のイメージ作り 居場所 学校に未やすい環境づくり</p> <p>連携 子どもの保健室内外での様子を把握 情報の伝達・共有 他職種・他機関との連携</p> <p>家族への対応 家族支援 保護者への支援 家庭環境の改善 家族と連携して一緒に見守る</p>

結 果 と 考 察

学生がKJ法を用いて養護教諭の行動の概念図を作成することを通し、学生の思考の活性化を促したいと考え授業を展開した。また、学生へのフィードバックの方法として学生が提出した概念図をもとに、学生一人一人の思考のプロセスにできるだけ忠実に筆者がスライドを作成し、ディスカッションの資料とし認知プロセスの外化をねらった。18枚のスライドを作成したが、そのうちの思考のプロセスがよくわかるもの、また学生自身の態度や価値観が導き出された4枚のスライドをもとに考察する。

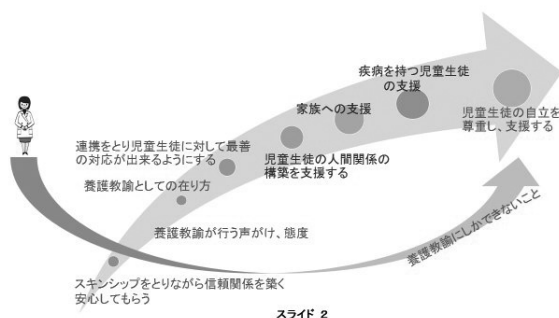
1. 学生の作成した概念図

概念図(1)は、4個の円を用いた概念図で提出されたものである。家族支援・人間関係支援には養護教諭のケアリング行動が必要だと表現している。また、養護教諭の教育実践の核(☆印)が子どものアイデンティティの確立のための支援であるという独自の思考のプロセスを示している。



学生の作成した概念図(1)

概念図(2)は、概念図(1)と異なり養護実践のゴールを児童生徒の自立とし、その過程を図示したものである。養護教諭にしかできないことという表現で養護教諭の特性が強調されていた。子どもとの出会いから未来へ、子どもの背景へ、健康な子どもから病気や障害を持つ子どもへと養護教諭の支援のプロセスや拡がり、さらに専門性へとひとつの図で表現している。学生は、思考の過程で養護教諭の支援の継続性と独自性を発見したと考えられる。



学生の作成した概念図(2)

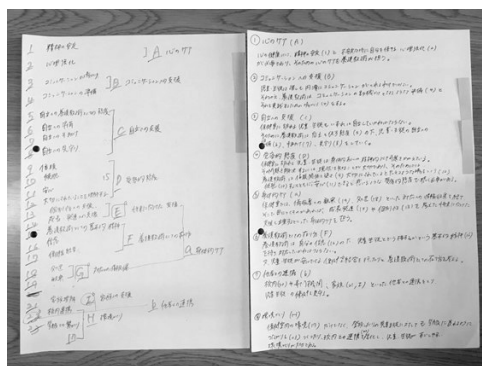
概念図(3)のもととなったグループ化した図(提出資料2)と説明文(提出資料3)から次のことが読み取られた。

【提出資料2】



学生の作成した提出資料（2）

【提出資料3】



学生の作成した提出資料（3）

細かく命名したケア因子名から概念を考え、その概念についてケア因子を使って説明しているプロセスが分かる。そこで概念図（3）のように、そのままの文章を表記した。ケアリングの因子となる語句を赤字にし、教育的視点に立った養護教諭の行動であることをコメントとしてフィードバックした。この学生が提出した資料からは、何度も反芻するかのように思考を繰り返し、「見守り」「場づくり」「つながり」という4文字の語句の中にケアのエッセンスを包括するような概念名を創出していることが読み取れる。ディスカッションの中でこの学生は、看護の中で語られるケアリングの概念とは似ているようで同じではないとし、自身の研究課題を発見したという。学生の探求心を生むというアクティブラーニングの特徴を出すことができたのではないかと考える。

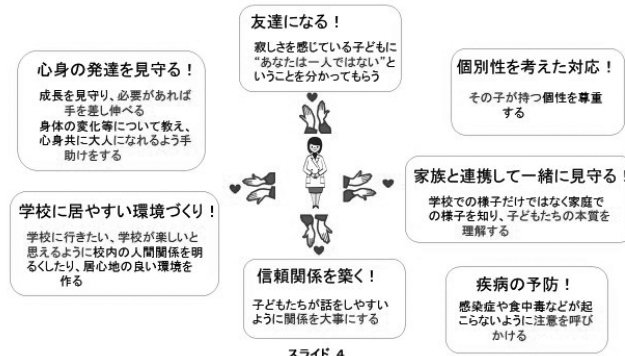
心のケア	精神の安定と、不安定な時に自分を保てる心理強化が必要であり、そのための心のケアを養護教諭が担う。
コミュニケーションへの支援	児童生徒のコミュニケーションの動機づけとなるような準備とそれを実践するための場づくりをする。
自立への支援	自立を促す態度のもと、児童生徒の自立への準備、手助け、見守りをしていく。
受容的態度	信頼関係を築き、大切にされていると思えるような場を作り、傾聴するとともに安心できると感じるような受容的態度で聴く必要がある。
身体的ケア	傷病者への観察、処置といった過程を通して、成長発達や個性性を考えた将来に向けた支援を立案するという身体的ケアを担う。
養護教諭としての在り方	養護教諭自身の信念のもと、児童生徒とどう接するかという基本的精神を持ち、対応していかなければならない。
他者との連携	校内や専門機関、家族といった他者との連携を図り、児童生徒の健康を見守る。
環境づくり	保健室内の環境だけでなく、保健室登校の児童生徒の対しても学級に居るようにつながりを作ったり、過ごしやすい環境づくりが大切である。

スライド 3

学生の作成した概念図（3）

概念図（4）について、説明文の中の、「あなたは一人ではない」ということを分かってもらう、必要があれば手を差し伸べる、大人になれるよう手助けをする、注意を呼びかけるなど独自の養護教諭の行動を表現している。養護教諭から差し出された手のイラストは教員がイメージしたものとして付け加えたが、ディスカッションの場で学生は手話でのボランティア活動をしていることを明かし、自身の信念を表出する機会にもなった。学生間では改めて、「必要であれば」「一人ではない」「呼びかける」という言葉の意味の重要性が討議された。学生の記述したものに

対して教員が応答することにより、学習をより深化させたと考える。



学生の作成した概念図（４）

2. アクティブラーニングについて

アクティブラーニングの定義として山地¹¹⁾は「思考を活性化する」学習形態であるとし、溝上¹²⁾は一方的な知識伝達講義を聴くという（受動的な）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のことであり、能動的な学習には書く・話す・発表などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴うとしている。ここで溝上の言う「認知プロセス」とは、認知心理学的な知覚・記憶・言語、思考（論理的/批判的/創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など）といった心的現象としての情報処理プロセスを意味しており、「書く・話す・発表する」ことによって表出されると述べられている。

今回の授業実践において、思考を活性化する、心的現象としての情報処理プロセスを踏むという点において、アクティブラーニングを活用できたと考えている。学生は、概念の説明の中で、「子どもが何かを始めようとしていること、出来たこと、頑張っていることを誉めて自信につなげる」や「何日も来ているからと遠慮してしまうことのないように、いつでもどんな時でも来ることができるように、来たことがないから行きづらいという子にも情報を送り、受け入れ体制を整える」と記述している。子どもサイドから省察した表現であり、細やかな配慮に満ちたかつ養護教諭の動きのある表現である。これらの養護教諭の行動は、データを分析する作業の中で考え、思いをはせ、イメージし、自己の体験を想起することにより創出されたものである。また、「養護教諭自身のイメージがひとつの環境となって子どもたちの心に働きかけている」という学生オリジナルの説明文は、教員の知識の伝達だけでは創出されなかった貴重な養護教諭のスタンスであり、ケアリング行動である。

さらに、データではスキンシップや体に触れるという言葉が、「水で冷やした手のひらを額に当てる」や「あたためた手のひらでホッペをくるんであげる」というケアリングに満ちた行為となって創出されている。これは、認知のプロセスで想像力と感性が生み出したものである。さらに、学生は提示された一連の能動的な養護教諭の支援行動をイメージしながらも、「待つ」というスタンスを創出している。「待つ」というのは、関心や信頼などのケアリングの概念を含むことに加えて、子どもの生きる力を育てるという教育の視点であると筆者は考える。これもまた、思考を活性化することにより生まれたと考えている。

結 語

金谷・小林¹³⁾は、温罨法の効果に関する研究の中で、養護教諭が高温の温湯で絞ったタオルをビニール袋に入れる作業や、熱さを確かめながら生徒の体を温めるひと手間、すなわち養護教諭が手数をかけ丹念に寄り添う作業は、生徒に心地よさや安心感、自分を大事にされている実感をもたらすと述べている。磯部¹³⁾の言うところの一見、非専門的に見える「角の丸い支援」と「手数をかけ丹念に寄り添う作業」とは同じ意味を持つものではないかと考える。

本研究においても、「待つ」「子どもを否定しない」「子どもの能力を信じる」「見守る」「養護教諭自身がひとつの環境となって子どもたちの心に働きかけている」「氷で冷やした手のひらを額に当てる」「あたためた手のひらでホッペをくるんであげる」というような表現で、認知の領域ではあっても学生は養護教諭の実践のありようを創出している。

この養護教諭から放たれる大切にされている感じ、安心できる感じは、信頼関係構築の源となり、健康支援及び健康相談活動には欠かせないものとなる。アクティブラーニングの手法の一部分を用いることにより、ケアの概念に満ちた養護教諭の行動を学生の思考の中に具現化できたのではないかと考察する。

今後の課題として、

- ① 授業評価
- ② カリキュラムの中での時間配分
- ③ 教員の作業負荷
- ④ キャリア教育へのシフト

の4点の検討を加えることにより、よりよい授業に近づくのではないかと考えている。

引 用 文 献

1. 保健体育審議会答申。(1997) 文部省
2. 宮崎久美子。(1999) 七色のビオフェルミン－養護教諭の行う健康相談活動－。日本教育公務員弘済会研究論文集, No.10 : 54-57
3. 中央教育審議会答申。(2008) 文部科学省
4. 岡田加奈子。(2015) 養護の本質から養護実践の未来へ。日本養護教諭教育学会誌, Vol.18 (2) : 25-26
5. 磯部聡。(2015) 学校臨床の視覚－その奥深さと豊かさ－。日本養護教諭教育学会誌, Vol.18 (2) : 27-30
6. 中央教育審議会答申。(2012) 文部科学省
7. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(用語集)。(2012) 文部科学省
8. キャロル・レップパネン・モンゴメリ 神郡博・濱畑章子訳(1999) ケアリング理論と実践－コミュニケーションによる癒し－。医学書院
9. Nel Noddings 立山義康他訳(2004) ケアリング 倫理と道徳の教育－女性の観点から－。晃洋書房
10. 早川操。(1998) 「ケアリングマインド」育成のための教育理論とその課題－N. ノディングズによるケアの連鎖構造と同心円構造の考察を中心に－。名古屋大学教育学部紀要, 45 (2)
11. 山地弘起。(2014) アクティブラーニングとは何か。大学教育と情報, No.1
12. 溝上慎一。(2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 東信堂
13. 金谷香子 小林央美。(2014) 養護教諭の行う生徒への対応における温罨法とその際のタッチングの効果。日本養護教諭教育学会誌, Vol.18 (1) : 43-54
14. 前掲書5) : 28

[2016. 9. 29 受理]